

# 「老健施設の看護」について考える

## [第2回]



入澤美紀子 [いりさわ・みきこ]

介護老人保健施設松原苑(岩手県)  
看護部長

### スタートした地域連携

看護師長会の勉強会に呼ばれた私は、まずは老健施設の役割と特養との違い、他科受診、この地域内の事業所の状況等について説明しました。どの看護師長も真剣に聞いてくれました。このことをきっかけに退院調整看護師との密な情報交換が本格的に始まったと思っています。

2011年3月11日。忘れられないあの日、私は午前中に大船渡病院に研修の相談に行きました。県立病院では4月からの異動人事の内示の日でざわついていました。私はというと、14時から4月開所の小規模多機能ホームのチラシを持って、居宅ケアマネジャーと市内の事業所に挨拶回りをする予定を立てていました。

### 2011年3月11日14時46分

14時にケアマネジャーと軽自動車に乗って挨拶回りをスタートし、市役所近くの「ふれあいセンター」の駐車場に着いて車から降りた途端、あの未だかつて経験したことのない大きな地震に襲われたのです。

前任地でDMAT(災害派遣医療チーム) 隊員だった私は、災害について学ぶ機会があり「いつかは来る宮城県沖地震津波」の確率は99%といわれていることを認識していましたので、「これは絶対津波が来る!!」と咄嗟に思い、目の前の瓦ぶきの屋根がグラグラと音を立てて崩れていくのを目の当たりにしながら、「早く松原苑に戻らなければ」と思い、揺れが収まったのを見計らい、細い道を通りながらなんとか松原苑に戻ることができました。

しかし、無事にたどり着いた私たちが目にしたのは、地震で大きく損傷している松原苑の姿でした。すでに事務長の指揮で苑庭への避難誘導が始まっていま

した。すぐに私もヘルメットを被って加わりました。

誘導中に「あれは何?!」と大きな声で叫ぶ職員の示す方向を見ると、2層にも3層にも見える真っ黒な大きな波が眼下の湾のなかに押し寄せてきます。誰もが経験したことのない、見たこともない津波が襲来し、現実とは到底思えないような光景を目にしながら、急いで目の前の利用者を安全に苑庭に避難させることで精一杯でした。

一次避難はしたものの、外気温は4℃。雪が舞い落ちるなか、低体温症を防ぐために現場の看護師はさまざまな工夫をしながら暖をとり、安全が確認された事業所へ歩行可能な利用者から移動してもらいました。

数少ない懐中電灯を頼りに皆で声かけをしながら、介護スタッフが横たわる利用者の間に入り、手をつないで夜を明かしました。頻回に起こる余震のたびに上がる悲鳴に似た声を聞きながらなんとか一晩を過ごしました。「大丈夫!大丈夫だよ!」と利用者に話しかける職員たちは自分の家族とも連絡がとれず不安な自分への励ましの言葉でもあったのではないかと思います。

このような状況のなか、家族のことを心配しながらもほぼ全員が48時間勤務で利用者の救護に必死でがんばってくれました。

しかし震災から3日目、海拔35mの高台にある松原苑は津波災害からは免れたものの、地震による被害が大きく、県の災害対策本部から「全員避難」の指示が出されました。

4か所に分かれて避難生活をするにあたり、介護の手は倍必要でした。市内の避難所や仮設外来には全国各地からDMAT、JMAT(日本医師会災害医療チーム)の応援が入っていましたが災害急性期の介護現場は自分たちでがんばるしかありませんでした。